白水社
世界の文学

パトリック・モディアノ
野村圭介訳

ある青春

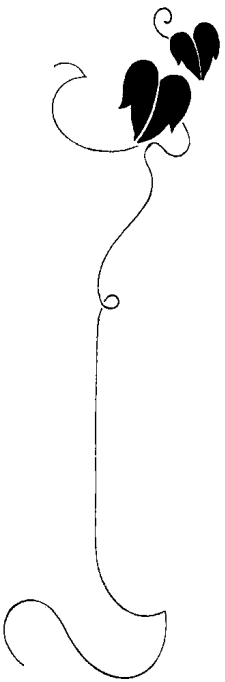
Une jeunesse

世界の文学

ある青春

パトリック・モディアノ

野村圭介訳



訳者略歴
一九四一年生
一九七四年早大大学院博士課程終了退学
二十世紀仏文学専攻
早大助教授
主要著訳書
モディアノ「パリ環状通り」
「フランス小説の現在」（共著）

白水社　世界の文学
ある青春
定価一五〇〇円
一九八三年一〇月二五日　印刷
一九八三年一一月一五日　発行
訳者　©野村圭介
発行者　高橋孝
印刷者　山田博
発行所　株式会社　白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
電話　営業部〇三（二九一）七八一一
編集部〇三（二九一）七八二一
振替　東京　九―三三二一八
郵便番号　一〇一
三陽社印刷・加瀬製本
ISBN 4-560-04443-0

リュディに
ジナに
マリーに

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

子供たちは、庭で遊んでいる。まもなく日課のチェスの時間になる。

「明日の朝、あの子のギプスをとるの」と、オディールが言う。

彼女とルイは山荘のテラスに腰をおろし、娘と息子が、ヴィテルドの三人の子供たちと一緒に芝生を駆けていくのを、遠くからじっと眺めていた。五歳になる息子は、左の腕にギプスをはめている。が、別に窮屈そうな様子もない。

「いつから、ギプスをしていたっけ」ルイがたずねた。

「ほぼ一月(ひとつき)」

その子がブランコからすべり落ちた一週間後、骨折からくる痛みに耐えかねているのに、気

がついたのだった。

「お湯をあびてくるわ」

オディールはそう言って二階に上がる。ふたたび彼女が下りてきた時、チェスが始まるだろう。浴室から、水の流れる音が聞こえてくる。

道路の彼方、モミの並木の蔭のロープウェイの建物が、温泉地の小さな駅舎のようだ。フランスで最も早くにできたロープウェイの一つらしい。ルイは、フォラーズ山の傾斜をゆっくりと登っていくロープウェイを目で追った。車体(キャビン)の鮮やかな赤が、夏山の緑に際立って見える。モミの木立にいったん姿を消した子供たちは、ロープウェイの建物に近い、木蔭になったロータリーに向かって自転車をこいでいる。

昨日ルイは、山荘の玄関に白い字体で〈サニー・ホーム〉と記してかかげた標示板の、釘を抜いた。はずされた板は、ガラス戸の前の地面に、まだころがっていた。十二年前、購入した山荘を保育所に改造した折、彼らは、いったいどんな名前をつければよいのか、よくわからなかった。オディールは、フランス語の〈いたずらっ子たち〉とか〈腕白小僧〉などというのがよいと言ったが、ルイは、英語の名前のほうがよりスマートだし、客よせにも効果的だと思った。結局彼らは、〈サニー・ホーム〉という名を選んだのだった。

ルイは標示板を拾う。〈サニー・ホーム〉。のちほど、これは引き出しの中に片づけよう。彼は、ほっと一息をつく。保育所、これも終わった。今日から山荘は、もっぱら自分たちだけのものになろう。庭の奥にある小屋を、レストランを兼ねた喫茶室に改築しよう。冬、ロープウェイに乗る前に、人々がそこを訪れるであろう。

かくれんぼを始めた子供たちの叫び声や笑い声とともに、夜の闇が、谷間や庭の奥からしだいにたちこめ始めた。明日六月二十三日は、オディールの三十五回目の誕生日。そして翌月には、彼もまた三十五歳を迎える。オディールの誕生日のために、彼は、ヴィテルド夫妻とその子供たち、それに小さなスポーツ用品店を経営している元スキーヤーの、アラールを招待していた。

山をくだり始めた赤いロープウェイは、モミの林の中に姿を没し、ふたたび顔を出すと相も変わらぬゆっくりとした速度でおりていく。夜の九時に至るまで、何度となくのぼりおりするロープウェイを目にすることができよう。そして、最終のそれは、フォラーズ山の傾斜を音もなく這う、一匹の巨大な蛍に過ぎないであろう。

*

「元気がいいぞ、このチビは……」

医者は少年の頬を軽くたたいた。いちばん感動したのはオディールだった。医者が、瞬時に薪を切断する電気のこぎりを思わせる器具を用いて、素早くギプス——たわむれにオディールが花の絵をそこに描いたギプス——を切り裂くと、不意に、生身の腕が現われ出た。無傷のまま。皮膚は、彼女の恐れていたように、干からびてもいなければ蒼白くもなっていなかった。少年は、自分の腕を動かし、ゆっくりと折り曲げてみる。何か信じ難いみたいに。口もとに心配そうな微笑を浮かべて。

「さあ、これでもう一度腕の骨を折ることもできる」と、医者が言った。

アイスクリームを食べてから山荘に戻る約束だった二人は、湖畔のカフェのテラスに、向かいあって腰をおろした。少年が選んだのは、イチゴ・アーモンドアイス。

「ギプスがとれてうれしい？」

彼はなんとも答えない。ひたすらまじめな顔付きで、アイスクリームを食べている。

その姿を眺めながら彼女は、果たしてこの子は将来、花模様をちりばめたあのギプスを、思い出すことがあるだろうか、と考えた。子供の頃の最初の思い出？　少年は目をしかめた、太陽がまぶしくて。湖面の霧はしだいに晴れわたり、そして今日は、彼女の三十五回目の誕生日。

やがて、ルイもまた三十五歳。三十五にもなって、何か新しいことが起こり得るだろうか。彼女は、ふと自分に問うてみる。無傷の皮膚、ついさきほどギプスの中から突然現われ出た、生身の腕を思い浮かべながら。中に腕を閉じこめていたあの固い覆いを打ち破ったのは、ほかならぬ腕自身だ、といってよいくらいだ。人生は、時に、三十五歳にしてゼロから再出発することもあるのだろうか。これは、思わず彼女の微笑を誘う大問題。ルイに問うてみなくては。自分は、そんなことってない、と思うのだが。ようやく平担な地帯にたどりつき、目の前に広がった湖のような穏やかな水面を、おのずから滑走する水上自転車。そして子供たちは成長し、やがて手もとから旅立っていくであろう。

瞼の隅の、一本の睫毛に苛立った彼女は、ハンドバッグを開け、もっぱらその小さな円鏡のために使っている空のコンパクトを取り出す。が、うまく睫毛を取り除くことのできない彼女は、つくづくと自分の顔を打ち眺めた。それは、昔と変わらない。二十歳の時も、同じような顔つきだった。口わきの微細なしわはもちろんまだなかったものの、そのほかは何一つ変わらない、何一つ……　そしてルイにもまた、変化はない。昔は、幾分かやせていただけ、ただそれだけ……

「誕生日おめでとう、ママ」

たどたどしい口調に一種の誇りをこめて、少年はそう言った。彼女はその子に接吻する。もし子供たちが、自分たちの生誕以前の両親を知ったら、なんと不思議なことだろう。まだ彼らが人の親にならず、ただ単に彼ら自身であった時の……　彼女の少女時代。祖母の家での、パリのシャルル・クロ街の。そこから、乗合バスの路線がいくつも出ていた……　少し行った所に、トゥレル水泳場の灰色の建物、映画館、そして坂になったセリュリエ通り。いささか想像をたくましくすれば、立ちこめた靄に陽の差した朝など、その坂道はまるで、山腹を海に向かって下る道路のようだった。

「さあ、帰らなくちゃ……」

山荘へと登る道を、息子を傍らに運転しながら、オディールはふと口をついて出た曲を、なにげなく口ずさんでいた。しばらくして彼女はそれが、オペレッタの――いつかジュネーヴの古道具屋でそのレコードを発見して思わず目を疑ったオペレッタの、冒頭の幾小節かであることに気づいた。〈ハワイの薔薇〉と題したオペレッタ……

*

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

彼らは、ロープウェイの建物の前の、緑色のベンチに腰をおろし、一方息子は、ロータリーを横切って自転車をこいでいる。補助車付きの自転車。横になって、ルイの膝に頭をのせたオディール。彼女は映画雑誌を読んでいる。

陽だまりを一つ一つ渡ってきた子供は、今度は彼の言うところの「大まわり」を始めた。時時、自転車を止めて、松ぼっくりを拾っている。ロープウェイの従業員が、建物の敷居の所で、煙草をくゆらしている。青い帽子と青い上着。まるで、駅長さんといった風情だ。

「どうかね、調子は?」と、ルイがたずねる。

「よくないね、今日の客足……」

でも、それはどうだっていい。たとえ空であろうと、赤いロープウェイは時間がくれば発車する。それが規則。

「御天道様は顔を出したんだが」と、従業員。

「まだ、すっかりバカンスというわけでもない」ルイはそう言って、「あと二週間もすれば……」

ロータリーをまわる子供は、ペダルを踏む足にますます力をこめる。サングラスをかけたオディールは、頁をしっかりと押さえながら雑誌に目を通している。風があるのだ。

*

眠っている彼の耳に、子供たちの歓声が届く。声は近づいては遠ざかり、ふたたびまた接近する。それは彼には、影と陽のたわむれのごとく、光のさまざまの強さに呼応するのだった。が、彼の見る夢はいつも変わらない。無人の競輪場の最上段に腰をおろした自分が、ハンドルをしっかり握ってゆっくりとトラックをまわる父の姿を、見つめているのだ。

誰かが呼んでいる。彼は瞼をあけた。目の前に、娘が立って微笑んでいる。娘の背丈は、オディールとほとんど変わらない。

「パパ……　お客さんがいらっしゃるわ……」

彼女の赤いドレスが、ルイを驚かせた。彼女は十三歳。夢からさめたばかりの、なかばまだ麻痺したような彼は、こんなにも大きくなった娘に唖然とする。

「パパ……」

彼女は父をとがめるように微笑む。手をとって、ソファから引き起こそうと試みる。ルイは抵抗するが、たちまち引きずられて立ち上がり、娘の額に接吻した。彼はテラスに出た。まだ

日は暮れてはいない。モミの並木の向こうに、幾人かの者が山荘へと登ってくるのが見える。彼は、アラールの低い声と、マルチーヌ・ヴィテルドの笑い声を耳に留めた。彼方を、フォラーズ山の傾斜にそって、ゆっくりと滑る赤いロープウェイ。それは、草を這う一匹のてんとう虫。

*

サロンの明かりはすべて消された。テーブルを囲んで待つルイ、オディール、ヴィテルド夫妻、そして子供たち。ルイの娘がケーキを持って台所から現われる。ケーキの上には火を点した八本のローソク——その三本は三十年の、五本は五か年の意味。彼女が近よると、歌声がおこる。

「ハッピー・バースデー・ツー・ユー……」

彼女はケーキをのせた盆を、テーブルの中央に置く。一同は、次々にオディールに接吻する。

「さて」と、ヴィテルドがたずねる「三十五歳になった御感想は?」

「もうじき、おばあさんになる年だわ」

「馬鹿を言うんじゃない、オディール」

「ママ、ローソクを消さなくちゃ……」

ケーキに身をかがめ、息を吹きかけるオディール。
「一吹きで！」
拍手。そしてふたたび明かりが点った。
「シャンソン！　シャンソン！」
「ではオディールが、皆さまのために〈巷の歌〉を……」と、ルイが言う。
「いや、いや……　絶対いやよ……」
彼女はケーキにナイフを入れる。すでにテーブルを離れ、テラスの端に一かたまりになった五人の子供たち。オディールとルイは、その一人一人に小皿に分けたケーキを届ける。
「この子たち、寝そうもないわね」ヴィテルドの妻の、マルチーヌが言う。
「やむを得んだろう。普段の日と違うんだから」とアラールが低い声で、「毎日三十五になるわけでもなし」
ヴィテルドが腕時計を見る。
「そろそろ行かなくては、ルイ。手数をかけて本当にすまない」
彼はパリ行の、二十三時三分発の夜行列車に乗ることになっていたが、ルイが、駅まで車で送ろうと申し出たのだ。

「さあ、出発！」と、ルイ。

テラスに腰をおろしておしゃべりをしている、ヴィテルド夫人とアラールとオディール。アラールの声がひときわ耳につく。むし暑い夜。遠くで雷鳴が聞こえる。

ヴィテルドは居間のまん中で、黒い折鞄を開けてみる。何も忘れ物はないかと、急いで確認しているらしい。階段で押し合いへし合いをする子供たち。二階の広い部屋部屋を駆ける彼らのあわただしい足音がしだいに遠ざかる。ヴィテルドにつづいて、ルイが山荘を出ようとした時、オディールはテラスから立ってそばに来た。

「誕生日おめでとう」と、ルイは言う。

「もう沢山よ」

「三十五歳になった感想は？」

彼女はルイの肩を揺さぶり、

「もう沢山……　すぐにまた、あなたの番よ……」

彼は妻を抱きよせ、二人は思わず吹き出した。彼らは生まれて始めて、幾度となく経てきた誕生日の一つを、今日祝ったのである。おかしなことを考えたものだ……　でも、それが子供たちを楽しませるなら……

*

スーツケースと黒い折鞄を後部座席に置くと、ヴィテルドはルイの傍らに座った。

「まったくすまない、ルイ……」

「いや、全然……　駅までたったの五分さ」

ルイはおもむろに車をスタートさせる。そしてただちにエンジンを切る。車は音もなく、まっすぐの脇道をくだる。

「いつ戻る？」ルイがたずねる。

「今度の週末。八月はここで、マルチーヌや子供と一緒に過ごしたい。君は幸せだよ、年から年じゅう山住いで……」

「とてもパリでは暮せなかった、と思うよ」

そうルイは言って、運転する時はいつもそれが習いの、ラジオのスイッチを入れた。

「いつから君たちはここに？」と、ヴィテルドがきく。

「十三年になる」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.